

北欧から学ぶ日本人の英語が苦手な真の理由

宮城県仙台第三高等学校 53 班

本研究は日本の英語教育について調査し、世界の中でも教育が進んでいるとされている北欧の教育形態を参考にしながら、今後の日本の英語教育のあり方について考えたものである。近年、日本では国際化に伴って、英語教育がより重要視されるようになってきているが、わたしたちが目指すべきはネイティブ英語ではなく、世界共通語としての英語だと言われている。そこで、英語教育の分野でも、スピーキングの発音に注目して、日本人が話す英語の特徴について調査したところ、細かな部分での発音の違いは見られたものの、北欧で使われているような伝わることを目的とした英語、日本語なまりの英語を身につけるべきであるという結果になった。

キーワード：教育，英語，発音，北欧

I. はじめに

現在の日本はグローバル化が進み、他国との関わりや外国人との交流が増えてきている。そこで、日本では英語教育の急速な普及が行われている。これまでは英語教育の開始は中学校が担っていたが、2020 年度からは小学校での英語教育が必修化され、小学 3 年生からは外国語活動、小学 5 年生からは教科としての英語に変更された。このように日本では英語教育が活発に行われているが、TOEIC の学力データなどから他国と比較すると、高い英語力が身につけているとは言えない状況である。世界の中でも学力が高いと言われている北欧の国々の教育方法について、ある論文から、相手に伝われば良いという考えのもと、北欧訛の英語が飛び交っているということがわかった。一方、日本では、単語や文法、発音などを学ぶことを主とした授業が一般的で、受験目的の英語学習となっている。将来、国境を超えた他国との交流がより活発化したとき、わたしたちに必要な英語力はどのようなものであるのか。そのためわたしたちは、北欧の教育方法と日本人の英語について調べることにした。

II. 研究方法

北欧の教育に関するインタビューと日本人が話す英語の発音の特徴を見つけるための実験を行った。

i) インタビューについて

北欧の国々で行われている教育について、現地の様子や雰囲気などを詳しく知るため、スウェーデンに留学中の大学生の方にリモートでインタビューを行った。

ii) 日本人の発音の特性について

日本人の英語の特性について客観的な結果を得るため、日本に留学中のネイティブスピーカーである 6 人の高校生に意見を聞いた。

iii) スピーキングについて

使われている単語や語数の量から、英文の難易度としてはあまり高くはないと考えられる、高校で使われている教科書内の本文を一部抜粋して、この実験の対象とする英文とした。

iv) 実験の手順について

教科書の一部から抜粋した英文を 1 人の生徒が音読し、それを録音した。6 人の留学生に音源を聴いてもらい、発音などに関して気になる部分に印をつけてもらった。

III. 探究内容

i) インタビューについて

得られた情報は以下の通りである。

- ・ICT を用いた授業が多い
- ・個人のレベルに合わせて一人ひとりテキストが異なる
- ・思考力を試される問題が多い
- ・日本語の授業では話す活動が中心
- ・小さい頃から英語を勉強している
- ・英語は 13 歳まで文法を勉強する
- ・英語の授業は質問表になぞって友達と話す活動が中心

ii) 実験について

先ほど示した手順をもとに行った実験の結果を説明する。図 1 は、留学生 6 人のうちのある 1 人が印をつけてくれた英文の原稿である。アクセントやイントネーションの部分において気になったという部分はいくつか見られた。その中でも特に多くあげられていたのは、「language」

や「borrow」、「differently」などの単語であった。

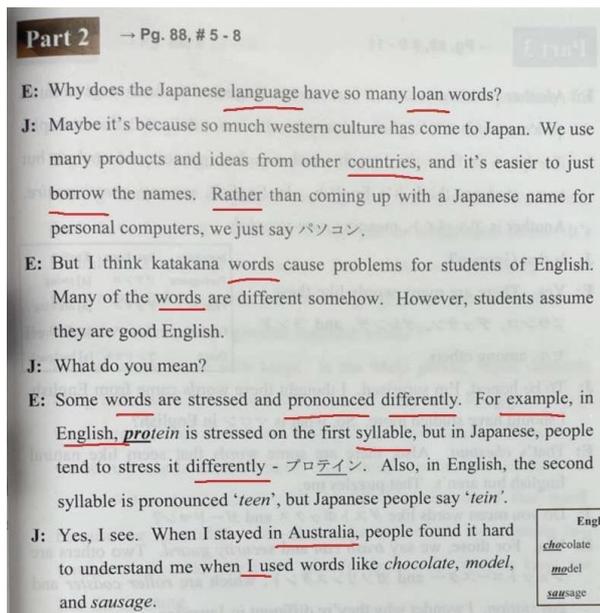


図 1 印をつけてもらった原稿

また、英語が普及した歴史的経緯や英語習得の方法、英語機能の違いなどが表現されている図 2 の同心円モデルについても考えた。内円には、アメリカやイギリスなど英語を第一言語すなわち母語として使用している国々が含まれる。外円は、インドやシンガポール、マレーシアなど英語を第二言語として使用している多言語社会の国々が含まれる。そして、拡大円には、日本や中国、ヨーロッパなど外国語として英語を学ぶ国々が含まれる。

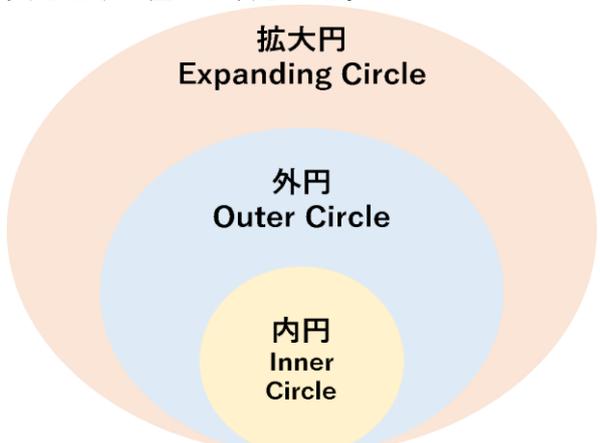


図 2 同心円モデル

IV. 考察

i) 北欧の教育方法について

インタビューから、北欧では効率の良い教育が行われていて、英語や日本語などの言語学習では、語彙や文法を学ぶことではなく、友達とのコミュニケーションを中心とした授業であることがわかった。そのため、北欧が高い英語力をもっている要因の一つのは、授業内での話す活動の多さであると考えた。

ii) 日本人の英語について

実験から得られた結果をもとに、気になる部分として印がつけられていたものの傾向を以下の通りにまとめた。

- ・「L」と「R」の違い
- ・「ʃ (th)」と「θ」と「s」の違い
- ・「ɔː」と「oʊ」の違い

このことから、日本訛の発音はそんなに多くはなく、ある程度絞られた傾向がみられたため、英語教育において、発音に関して集中しすぎる必要はないのではないかと考えた。また、実験からわかった日本人の発音の特性についてまとめたパンフレットを作成した。

iii) 身につけるべき英語について

図 2 の同心円モデルより、世界で使われている英語の大部分は日本が含まれている外国語としての英語、つまり国際共通語としての英語であることがわかる。現在の日本の英語教育が目指しているネイティブ英語は、全体の一部分であるため、わたしたちの身近な英語として身につけるべきなのは、ネイティブではなく、国際共通語の英語であると考えた。

iv) 日本の英語教育について

図 3 は臨界期仮説を表したものである。これは、言語をスムーズに取得できるのは一定の年齢までであるという説であり、12 歳ごろが臨界期の終わりであると考えられている。このことから、学習時期が早ければ、言語習得がより円滑になるということがわかる。北欧では小さな時期から英語教育を始めているが、日本では臨界期が過ぎる小学校高学年や中学校から英語教育を始めるため、高い英語力が身につかない一つの原因であると考えた。

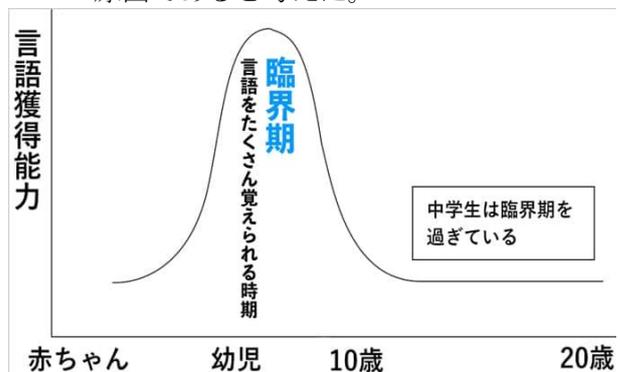


図 3 臨界期仮説

v) 日本との比較について

わたしたちは、日本の教育方法との比較の対象国として、学力を基準にして考え、その中で高い学力をもつ北欧の国々に着目した。しかし、北欧と日本の異なる点として、母語と英語に類似性があったり、日本よりも英語が生活の中に

身近にあるため、英語にふれる機会が多かったりと、英語が身につけやすい環境であるといえる。そのため、日本との共通点が多い国との比較も必要であると考えた。わたしたちが、リモートで韓国の高校生と交流した際、生徒の高い英語力に驚いた。わたしたちは教員を通して会話をしているが、韓国の高校生は、生徒自身でわたしたちとコミュニケーションを行っていた。北欧の国々だけではなく、日本と共通する点が多いながらも、高い英語力をもつ韓国との比較を行うことで、日本人が目指すべき英語力がどのようなものか、より具体化できるのではないかと考えた。

V. まとめ

わたしたちが普段学んでいる英語は、受験目的のためという意識が強いかもしれない。だが、日本では国際化が進んでいて、今後はより他国との交流が盛んになると考えられる。そのためわたしたちは、将来に役立つ英語力を身につけるべきである。今回、インタビューや実験を通して、日本人が目指すべき英語力は、ネイティブな英語ではなく、国際共通語としての伝わることに重点をおいた英語であることを見つけることができた。今後の日本の英語教育は、今よりも早い時期から英語を学ぶ機会を設けたり、文法や発音に焦点を当てすぎずに、人とのコミュニケーションを重要視した活動を増やしていくべきである。

参考文献

渡辺宥泰 2022年 北欧の英語：国際英語の範例として

小野尚美 2020年 World English 時代を生き抜く：日本の英語学習者が目指す英語コミュニケーション能力

白畑知彦 2004年 言語習得の臨界期について

高橋基治 第二言語習得研究からみた発音習得とその可能性についての一考察—臨界期仮説と外国語訛を中心に—

https://www.jstage.jst.go.jp/article/cac/42/1/42_49/pdf

http://repository.seikei.ac.jp/dspace/bitstream/10928/1270/1/bungaku-55_1-21.pdf

https://www.jstage.jst.go.jp/article/secondlanguage2002/3/0/3_3/pdf

<https://basic-english.me/wp-content/uploads/2017/04/KJ00007235219.pdf>